

近代中国における大正文学の受容：『現代日本小説集』及び芥川龍之介を手掛かりとして

秋吉， 收
九州大学大学院言語文化研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/1470428>

出版情報：言語文化論究. 33, pp.19-37, 2014-10-14. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



近代中国における大正文学の受容

——『現代日本小説集』及び芥川龍之介を手掛かりとして——

秋 吉 收

序

魯迅・周作人編訳『現代日本小説集』（1923年6月、上海商務印書館）は、中国で最初に出版された日本近代文学の精選集として極めて重要な意義を有する（奇しくもその一ヶ月後、1923年7月に絶交に至った兄弟二人の最後の共同作業としても注目されよう）。この作品集には、大正時代を中心とする15作家30篇の作品が収められ、周作人によるその序文（1922年5月20日於北京）には、次のように記されている。

日本の小説は二十世紀において驚くべき発達を遂げ、国民的文学の精華となつたばかりでなく、幾多の有名な著作はまた世界的価値を持つようになった。（中略） 中国は日本と種々の関係があり、我々は日本を知る必要もあれば、日本を知ることの便利もある。いまこの創始の書を編むことができた。（中略） そのうち、夏目、森、有島、江口、菊池、芥川五人の作品は、魯迅君の翻訳で、そのほか（国木田、鈴木三重吉、武者小路、長與、志賀、千家、江馬、佐藤春夫、加藤武雄：引用者注）は私が訳したものだ。（拙訳による。注記のない限り以下同じ。）

収録作家の一人芥川龍之介自身が、この『現代日本小説集』の出版に対してエールを送っていた事実は日中近代文学の交流という視点からも興味深い。芥川「日本小説の支那訳」（1925年3月1日『新潮』第42巻第3号）より引用する。

千九百二十二年五月於北京、——と云ふ周作人君の序文によれば「日本の小説は、二十世紀に於て驚異すべき発達をし、国民的文学の精華となつたばかりでなく、幾多の有名な著作は又、世界的価値を持つやうになった。（中略） 支那（引用者注：周作人原文「中國」。以下同じ。）は日本と種々の関係があり、支那人は日本を知る必要もあれば亦、日本を知る便利もある。そこでこの翻訳集を出した」と云ふことである。…翻訳は、僕自身の作品に徴すれば、中々正確に訳してある。…巻末には各作家に関する短かい紹介を附録として添へてある。これも先づ要領を得てあると言はなければならぬ。…これを現代の日本に行はれる西洋文芸の翻訳書に比べてもあまり遜色はないのに違いない。

実は、芥川の文学を初めて中国に紹介したのは、魯迅その人であった。彼は『現代日本小説集』出版二年前の1921年6月、芥川の初めての中国来訪に合わせて（しかも彼が北京に入るその当日から）、北京『晨报副刊』に「鼻」と「羅生門」を連載するという、極めて魯迅らしいやり方で歓迎の

意を表明していたのだ。この二篇は、下って1927年にはやはり中国初の『芥川選集』¹に収録されることになる。このように魯迅は一貫して芥川に意を払っていたことが史料的にも跡付けられるが、創作に当たって直接芥川作品を取り込むなど具体的な文学交流、影響関係という点でも両者は極めて興味深い接触をもっていた（以前の拙稿を参照されたい²）。

*

さて、次に挙げる『現代日本小説集』研究状況概観の表は、15人の収録作家（及びその収録作品）が中国及び日本で、特にその中国との関連という視点から如何に研究されているかを、単純に論文数を並べることで参照したものである。日本近代文学の中国への受容に関する研究は、やはり漱石や鷗外、芥川などの著名作家に集中していることがわかるが、それもさほど多くはなく、他の作家については極めて少ない状態であることが了解されよう。

*『現代日本小説集』収録作家の研究状況概観（2014年1月現在）

収録作家		国木田独歩	夏目漱石	森 鷗外	鈴木三重吉	武者小路実篤	有島武郎	長与善郎
中 国	CNKI 論文数	1	292	65	1	29	75	1
	収録作関係	0	1	0	0	0	1	0
	備考（研究の傾向等）		「猫」、魯迅多	「舞姫」多	“児童文学”関係	「新村」、周兄弟多	「或女」、魯迅多	
日 本	CiNii 論文数	461	2045	1514	74	338	712	31
	収録作関係	4	1	7	0	0	10	0
	中国関係	0	25	45	0	6	7	0
	備考（研究の傾向等）	「少年の悲哀」のみ	“漢詩”比較的	「舞姫」、日清日露戦	“児童文学”多	中国関係は留学生のみ	魯迅関連多	
志賀直哉		千家元麿	江馬 修	江口 渙	菊池 寛	芥川龍之介	佐藤春夫	加藤武雄
83		2	1	0	12	304	32	0
2		0	0	0	1	37	0	0
「暗夜行路」 「城崎にて」多					「父帰る」多	「支那遊記」、魯迅関連多	郁達夫との関係、台湾	
1068		41	20	60	299	2213	355	5
18		0	0	0	0	多（「鼻」「羅」）	0	1
1		1	0	1	0	44	30	0
郁達夫関連				魯迅関連	中国関係論文ゼロ	中国人留学生の研究多	中国での傾向に同じ	「郷愁」関連のみ

注. CNKI: Chinese National Knowledge Infrastructure（中国知識網）

CiNii: Citation Information by NII（国立情報学研究所 National institute of informatics）

このように、日本近代文学の中国における受容に関する研究は、意外なほどに進んでいないのが現状である。日本においては、近代中国の著名作家研究、日本への受容、日本文学との接触については蓄積を有するが、日本文学の中国への進出に注目した研究は非常に少ない（日本での研究に数えられるものも、実はその多くが日本に渡来した中国人留学生によるものである）。一方、中国の日本文学研究においては、その方面での業績が日本より多いとは言え、やはり盛んとは到底言い難い状況にある。またその研究視角は往々にして中国の文学史にやや偏したものであり、日本文学の背景等の詳細な目配りが疎かになっているものが多いようだ。

こうした状況を醸成する原因としては、近現代における日中国国家間の微妙な関係が研究対象選定に影を落としていることも否定できないだろうが、最大の要因は当時の中国における日本観にあると考えられる。つまり、近代中国にとって日本はあくまでも西洋を学ぶための架橋に過ぎず、“日本”それ自体は決して“対象”とは見なされていなかったことだ。

だが、日本にやって来て、日本の文化、学術に日々肌で触れていた留学生たちは、日本を通して西洋を学ぶと言いながら、意識するとしなないと拘わらず実際には確実に日本そのものを咀嚼吸収していた。魯迅、周作人という当時最先端の文学者が『現代日本小説集』を翻訳出版したことにも象徴されるように、20世紀初頭の日本留学生たちは、中国“近代”文学の曙光のもとで、日本の近代作家を数多く翻訳紹介しており、周作人のようにその研究に従事するものも現れた。日本の近代文学は、中国近代文学の創出に大きく関わっていたのである。

小論では、まずは中国文壇が特に注目した芥川龍之介を中心に佐藤春夫などその周辺にも目を配りながら、意識的に“日本”を視座に据えつつ、従来から注目される資料についても改めて繙くことで、中国における日本近代（大正）文学の受容について考察を試みる。

謝六逸「二十年來の日本文學」（1929年7月『小説月報』第20巻第7号【現代世界文學號（上）】）³は、中国で最初の本格的な「日本文学史」と位置付けられる⁴ものだが、芥川及び佐藤春夫については、次のように解説している。

芥川龍之介 芥川氏は文壇における天才で、また一人の稀有な読者家でもある。作品の取材は該博かつ新鮮で、その卓抜した観察と、洗練された修辭、そして表現の巧妙さは、新技巧主義の代表者たるに十分で、その文才は一世を風靡する。…「羅生門」「地獄変」「藪の中」などの作品は、自然主義とともに没落した歴史小説を、新たに復活させるものである。…「秋」「お律とその子」などは、精緻なるリアリズムの手法を用いている。芥川は昭和二年に多量の睡眠薬を吞んで自殺したが、世間はそのため騒然として不安に陥った。（中略）

三田派 佐藤春夫は現代の文壇で、菊池や芥川に勝るとも劣らない著名作家である。彼はもともと詩人で、バラや月の光を詠み、高踏的趣味とロマンティックな感情を兼ね備え、『殉情詩集』がある。また彼の小説は、憂鬱の情調を描くことで知られる。彼の藝術境地は西洋近代の退廃の美と、日本に固有の風雅とを兼ね備えている。人妻との恋愛や、娼婦のため息を書き、市民生活の現実を反映して、その筆は銀線の微細な調べを奏でるかのようだ。「田園の憂鬱」と「都会の憂鬱」が彼の代表作である。

（中略）

以上述べたところが、この二十年來の日本文学の輪郭である。まだ数多くの重要作家が存在するが、時間の関係で挙げられなかったことは、誠に残念である。

本書が参照した資料は以下の通り。加藤氏の著書から多くを得たことを特に記しておく。

加藤武雄 明治大正文学の輪廓（新潮社）⁵

木村 毅 大正時代文壇概観（讀賣新聞）

徳田秋聲 昭和劈頭の文藝（讀賣新聞）

新居 格 文壇の現状を報ずるの書（文章俱樂部十月號）

日本の文壇に対する熱意が感じられて興味深いのが、当時の中国文壇に於いても、日本の文芸批評書ひいては『文章倶楽部』等の文芸誌が、時差なく直接読まれていたことは特に注目されよう。

次に引く佐藤春夫の「からの因縁—(支那雑記の序として)」(1941)は、逆に芥川を始め日本文人の側から中国がどのように認識されていたかが窺われる貴重な証言である。

事改めて断るまでもなく、自分は勿論支那學者ではなく所謂支那通でもなく、また支那文學研究者でさへもない。もし自分に何か強いて支那の二字のついた肩書をつける必要があると假定したら、まあせいぜい支那趣味愛好者ぐらゐなところかも知れない。そうしておそらくはその最後の一人であらうかと思ふ。(中略) 明治の末年から大正の初期にかけて支那の文物に對して文壇で多少の關心を持つてゐたのは、亡友芥川龍之介と自分ぐらゐであつたらしい。博學多才な芥川は少年時代から支那文學を愛讀する外にわが國の古典にも通じ歐洲の近代文學にも精通してゐたから、自然、比較的精通せずまた當時一向流行しなかつた支那文學などをあまりふりまわす必要もなかつたけれど、自分は半人前の英語と半人前の漢文の讀書力とを合せて極く幼稚な支那文學の紹介をしてゐた。(中略) この三十年の間に支那の土地を踏んだ事が四度である。二十數年前、大陸旅行の趣味と必要とを言ひ出したのも自分であつた。谷崎が先づ、次いで芥川が行つたのも自分の發案に促されたのであつた。⁶

文学者として日中の狭間を直に歩いた彼等の中国觀、そしてその文学は中国文壇にも陰に陽に影響を与えていくことになるが、後世の日本の中国研究者たちにも極めて重要な契機を付与することになった。竹内好は『中国を知るために』(1967)の中で、次のように書いている。

私たち年輩のものは、中国のイメージをつくる上に谷崎さんの影響を蒙っている。谷崎さんばかりでなく、同時代に佐藤春夫さんもいる。(中略) 芥川龍之介もほぼ同時代である。

この人たちによってつちかわれたイメージが、私の中国觀の根底にあるということが、前代と後代から自分を分ける世代特徴になっているように思う。そのイメージに抵抗することを通じて自分なりのイメージを形成してきたのだから、私の中国觀は根本において大正文学によって規制されている。⁷

二

それでは、芥川文学の受容について具体的に見ていくことにしたい。小論冒頭にも書いたように、最初に芥川を中国に紹介したのは魯迅であるが、それもさして大きな反響を呼ぶことはなく、実際に芥川が中国文壇で急に注目されたのは、皮肉なことにその自殺の衝撃からであつた。その1927年7月(24日)とは、中国でも第一次国共合作の破綻を決定付ける四・一二クーデター、つまり国民党による左翼分子大量虐殺事件の直後という社会全体が殺伐とした情勢の下にあった。次に引く文章、郁伽「芥川龍之介の自殺」(1927年7月25日『東方雜誌』第24巻第14号)は、芥川の自殺に対する中国側の恐らく最も早い反応であるが、その焦点は文学そのものとは離れたところに置かれている。

神經衰弱を患ひ自殺に至っただけで、それ自体は尋常なる死亡に過ぎない、…我々中国では昔から文人をあまり尊重しないので、芥川龍之介のような尋常な死は、むろん何ら深い同情を

引き起こすものではない。しかし資本主義社会の統制のもとで労働を切り売りする文人たちは、この物寂しい初秋の折、異国から伝わってきた悲しい報せを耳にして、またどんな感想をものすべきであろうか。(中略)彼の自殺は話によると生活の困難とも無関係ではないという。資本主義の出版制度の下では、売文生活もやはり搾取を受けるものであるから。

アヘン戦争以来の諸外国の侵略と戦乱により疲弊しきった中国に共産党が設立されたのは1921年であったが、社会主義思想への傾斜、階級意識の浸透といった当時の知識人の一つの傾向がここからも垣間見られる。「我々中国では昔から文人をあまり尊重しない」とは、主義への過度の傾倒かと読めようが、実際、芥川追悼文の中にはやはり文学者としての芥川を説くものも少なくない。例えば次に引く黎烈文「海上哀音―聞芥川龍之介之死」⁸ (1927年8月21日『文学週報』第5巻第3期)は文学者芥川龍之介への崇拝が綴られ、却って読者に違和感すら感じさせる。

芥川氏の作品は我が国でも早くに紹介した者がある。実際、何故か分らないが、新思潮派の三本柱(菊池寛、久米正雄、芥川龍之介)のうち、私が最も敬い慕っているのは芥川氏である。そればかりか、現代日本の数多の作家の中で私が最も愛読するのもしなわち芥川氏の作品である。芥川氏の創作は周到かつ厳密で、日本の現代一般作家の中で、量から言えば芥川氏は比較的少ない方に数えられようが、しかしそのため彼の作品はその殆どがすべて価値を有する、完全に世界水準の価値を。彼が菊池寛のように退屈な通俗長編を濫造することは有り得ないが、それは彼の幸運であるとともに、その偉大さをより高める結果となる。

1926年5月から27年9月まで日本に留学(一高予科)していた黎烈文は、日本で芥川氏の作品に親しんだが、帰国直前に芥川の訃報に接して筆を執ったようだ。帰国後の1928年10月には、商務印書館から『河童』と題する芥川作品翻訳集を出版、ここに引く「海上哀音―聞芥川龍之介之死」を再度収録して記念するほどに芥川への敬慕を示していた。

上海の立達学会編『一般』雑誌(開明書店刊)は、芥川の死に反応して小特集を組んでいる。1927年9月第3巻第1期には夏衍(署名:端先)訳「芥川龍之介的絶筆」を掲載、翌10月の第2期には「南京の基督」「手巾」等の翻訳に加えて章克標、滕固らの追悼文を載せる。章克標「芥川龍之介的死」を見てみよう。

芥川龍之介が死んだ、芥川龍之介が自殺した。…その時、ちょうど佐藤春夫が上海に来ていたので、日本文芸界に關係を有する国内の人士は佐藤氏と交際して藝術を談ずる機会をはかり、聞くところでは大規模な歓迎会がまさに準備されていたという。隣邦の文人の光輝を借りて寥々たる中国文壇にも一点の灯火をもたらし、呼び掛けと為し刺激と為す、私はそうした噂を耳にして文芸界のためにも非常に喜ばしく思っていた。あに図らんやその喜びがいまだ実現せぬうちに悲報がやって来ようとは。(中略)物質生活は決して豊かではなかったが、彼は藝術の良心と生来の潔癖から、実入りの多いいわゆる「通俗小説」、あの長くて不快で身の毛のよだつほど醜いシロモノに決して手を染めようとはしなかった。日本の文壇で所謂人格者と言え、故有島武郎を除いては彼を残すのみ。なんということだ! その二人がいずれも自殺の道へ踏み出すとは。

筆者の章克標(1900-2007)自身も京都帝大への留学(1920-?)組だが、彼らの活動状況が窺えて

興味深い。また中国においても、芥川の自殺は二年前にやはり自殺を遂げた有島武郎と比較して論じられることが多かった。日本留学(1917-26)中に創造社同人となった鄭伯奇(1895-1979)の「芥川龍之介與有島武郎—文人自殺心理的一考察—」(1927年9月『洪水』第3巻第34期)には次のような言葉が見えている。

有島氏は情熱的な南国びとで、芥川氏は達観せる江戸っ子であった。有島氏は大資産階級の富豪で、芥川氏はプチブルたる知識人であった。(中略)有島氏は西欧の思想を熱愛したが、芥川氏はフランスの芸術やドイツの思想を受け入れながら、根本的には東洋の趣味を指向した。

そこに見える階級理論等の言説から、中国においてはこれらの資料を主として左翼革命思想の萌芽発展と理解する向きもある⁹が、佐藤春夫ら日本文人との積極的な交流や有島と芥川の文学傾向の差違分析等に見える彼らの真摯さからは、日本の近代文学自体への想いの深さが読み取れる。

さて、同時期の1927年9月、時の中国文壇最大勢力たる文学研究会機関誌の『小説月報』(第18巻第9号)が「芥川龍之介專輯」を組むことで、芥川への注目は一つのピークを迎えることになる。¹⁰ 該誌には芥川の小説10篇と小品4篇の翻訳のほか、芥川文学紹介と詳しい年表などが掲載されている。その文学紹介、鄭心南「芥川龍之介」を読んでみよう。

本年7月24日、日本の著名なる文学者の芥川龍之介氏が突然自殺した。このニュースは、日本全体を震撼させただけでなく、世界の文壇にも感電したかのような突然のショックを与えることになった。明治末期の日本の文壇は、ほぼ自然主義に席卷されていたが、大正時代に至り、その勢力も次第に衰え、白樺派の人道主義或いは新理想主義、新思潮派の新理知主義が起り、…芥川は新思潮派の中心作家だが、…その文学の特色は、心理描写を題材にとり、いわゆる心理小説あるいは主題小説とは、つまりこの種の文学を指している。(中略) 芥川氏の作品の題材について論ずれば、それは四種に分けられる。1. 日本の歴史事実、2. 宗教上の伝統、3. 中国の故事および奇聞、4. 現代社会を題材としたもの。そのうち、我が国に関する題材は実に大きな部分を占め、例えば「秋山図」「杜子春」「黄粱夢」「英雄の器」「女体」「尾生の信」「南京の基督」「湖南の扇」「首が落ちた話」等々は、すべて我が国に取材する。文章の上には、風刺やそしりが少なからず含まれるとは言え、それらは彼の現代社会に対する不満の表現であり、我々にも共感できるものだ。彼が外国人であるから故意に軽蔑すると見なすことはできない。

引用は一部だが、かなり本格的な芥川文学の紹介であることが見て取れよう。文学史上の位置やその文学における心理描写への着目、題材の分類から中国との関連等々もよく整理されており、かなりこなれた芥川評論になっている。それだけに依拠した種本の有無なども気になるが、最後に「すべて我が国に取材する。文章の上には、風刺やそしりが少なからず含まれるとは言え、それらは彼の現代社会に対する不満の表現であり、我々にも共感できるものだ。彼が外国人であるから故意に軽蔑すると見なすことはできない。」と書き付けたのは確かに中国人たる著者だと考えてよからう。芥川が中国を“軽蔑”したとの誹りは実は彼の『支那遊記』の反響に発しており、そのことについては、次章で検討することにしたい。

三

“自殺”と並んで中国文壇の興味を強く引きつけた芥川に関する話題とは言えば、その中国旅行記『支那游記』（1925年11月、改造社）であった。1921年3月～7月（門司→上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等を歴訪）、大阪毎日新聞社特派員の身分を得ての生涯唯一の外遊は、佐藤春夫の言葉にもあるように、谷崎や佐藤に刺激を受けて敢行されたものだったが、彼の創作と中国文学の関連からも容易に窺えるように、そこには日本文人の伝統とも言い得る中国への深い想念が強く作用していた。だが、旅行中芥川は常に体調不良に悩まされたことに加え、日本による二十一箇条要求（1915年：山東半島におけるドイツ権益その他の日本への譲渡）に端を発した激しい排日運動の最中であつたなどの情勢から、彼が夢に思い描いたようなロマン紀行は最初から到底望み得ないことであつた。『支那游記』の随所に散見される、当時の日本におけるアジア蔑視を体現したような中国侮蔑の表現等々の問題点については、新聞記事として庸俗な読者の嗜好に合わせたものであつたとか、芥川のような優秀な文人すら超然たるを得ないほど時代が混迷の深みにあつた、或いは芥川の資質自体に発す等々、すでに多くの評価がなされている。まずはやはり実文を一部引用して、その有様を確認しておきたい。

「自序」「支那游記」一卷は畢竟天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist 的才能の産物である。（中略）

『上海游記』『六 城内（上）』露地を向うへつき當ると、噂に聞き及んだ湖心亭が見えた。湖心亭と云へば立派らしいが、實は今にも壊れ兼ねない、荒廢を極めた茶館である。その上亭外の池を見ても、まつ蒼な水どろが浮んでゐるから、水の色などは殆見えない。池のまはりには石を疊んだ、これも怪しげな欄干がある。我が丁度其處へ來た時、浅葱水綿の服を着た、辮子の長い支那人が一人、…悠悠と池へ小便をしてゐた。陳樹藩が叛旗を翻さうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英續盟が持ち上らうが、そんな事は全然この男には、問題にならないのに相違ない。…曇天にそぼ立つた支那風の亭と、病的な綠色を擴げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆隆たる一條の小便と、——これは憂鬱愛すべき風景畫たるばかりぢやない。同時に又わが老大國の、辛辣恐るべき象徴である。…「御覽なさい。この敷石に流れてゐるのも、こいつはみんな小便ですぜ。」…さう云へば成程空氣の中にも、重苦しい尿臭が漂つてゐる。この尿臭を感じずるが早い、魔術は忽ちに破れてしまつた。（中略）

『長江游記』『三 廬山（上）』若葉を吐いた立ち木の枝に豚の死骸がぶら下つてゐる。それも皮を剥いだ儘、後足を上にぶら下つてゐる。脂肪に蔽はれた豚の體は氣味の悪い程まつ白である。…吊下げる支那人も惡趣味なら、吊下げられる豚も間が抜けてゐる。所詮支那程下らない國は何處にもあるまいと考へた。（中略）

『長江游記』『一 蕪湖』…支那に對する私の嫌惡はだんだん逆上の氣味を帶び始めた。

その夜唐家花園のバルコンに、西村と籐椅子を並べてゐた時、私は莫迦莫迦しい程熱心に現代の支那の惡口を云つた。現代の支那に何があるか？ 政治、學問、經濟、藝術、悉く墮落してゐるではないか？ 殊に藝術となつた日には、嘉慶道光の間以來、一つでも自慢になる作品があるか？ …私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この國民的腐敗を目撃した後も、なほ且支那を愛し得るものは、顏唐を極めたセンジュアリストか、淺薄なる支那趣味の倘怍者であらう。いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでゐないとすれば、我我一介の旅客よりも、もつと嫌惡に堪へない筈である。

この芥川『支那遊記』への中国側の反論として必ず引かれるのが、巴金（署名：余一）「幾段不恭敬的話（若干の無遠慮な話）」（1935年1月5日『太白』第1巻第8期。評論文集『点滴』[1935年4月、上海開明書店]収録）である。その内容は次のようなものであった。

ふと改造社版の『芥川龍之介集』を繙くと、かの『長江遊記』が目にとまった。久しぶりだ！前に読んだのは8年前だったか。「現代の支那に何があるか？ 政治、学問、経済、芸術、悉く墮落してゐるではないか？ 殊に芸術となった日には嘉慶道光の間以来、一つでも自慢になる作品があるか？」（中略） 聡明絶世の芥川氏は帰国後、文章中の「支那」という二字を「日本」と置きかえて、同様に日本人に問いただしたことがあっただろうか？

（中略）

文学といえば、日本ではすでに驚くべき発達をしているということであるが、だが眼の前の新聞紙をひらいて見れば、目にふれる巨大な広告は、『堂々の御出馬』だとか、文壇のかの何とかだといって、菊池寛、吉川英治、大仏次郎、加藤武雄の類いの通俗小説作家の名前と、忠臣蔵、加藤清正といった題材ばかり。侠客と恋愛とが日本の通俗小説を代表しているのだ。この種の小説の流行と多数の作家の（それへの）低頭は、日本の文学がすでに如何に驚くべき程度にまで墮落しているかを示しているのではないか？

名声の高い、故芥川氏の作品に対して、私は第一に大なる反感を抱かざるを得ない。この作家は一本の犀利な筆を持ち、相当な文学修養をつんでいることは事実だ。だがこれ以上にまた何があるのだろうか？ つまり形式以外に彼の作品には如何なる内容があるのか？ ということだ。私は思う、空虚の二字をもって彼の全作品を批評しても、妥当でないということではできないだろうと。この五百余頁の大冊『芥川集』（改造社版『現代日本文学全集』）のなかには、一、二編をのぞけば、すべて読んだ後で、もう一度読みたくはならない作品ばかりではないか？

（中略）

残念なことには、このような無遠慮な話を故芥川氏に聞いてもらうことができないのである。

（下線は引用者による。以下同じ。）

満州国建国、上海事変（1932）など日本の侵略がますます露骨になる中で書かれたこの巴金の文章がやや感情的な色彩を帯びていることは自明で、戦後出版された自分の文集からはこの文章を削除する¹¹など、巴金自身がその微妙さを意識していたことが窺われる。ただ、現代中国の文芸界を一貫して牽引した文豪巴金による発言であり、この文章は中国で芥川龍之介の名前に言及する時にはすぐに想起されるほど、現在に至るまで強い影響力を有している。

文中の「文学といえば、日本ではすでに驚くべき発達をしているということであるが（原文：文学罷，據說這在日本已經有了可驚的發達）」の箇所は、小論冒頭に引いた、芥川作品二篇を含む初の日本文学アンソロジー、魯迅・周作人編『現代日本小説集』の周作人序文「日本の小説在二十世紀成就了可驚的發達」を意識して発せられた可能性が高い。巴金の脳裏に魯迅・周作人の貢献が想起されていたことは、文学史におけるその意義を再確認させる。

ではここで、『支那遊記』の日本における評価を確認しておきたい。近代文学研究を牽引した吉田精一の次の言葉（1942）は影響力の最も大きいものである。

「支那紀行」は、…様々なスタイルをとり入れ、文章や體裁に工風をこらして、龍之介のエスプリを発揮したものである。機智と諧謔と皮肉が百出して、つまらない讀物ではないが、要す

るに小説家の見た支那であつて、新聞が、もしくは新聞の読者が期待したかも知れぬやうな、支那の現在や將來を深く洞察し得たものではない。¹²

このような、芥川『支那遊記』皮相論、いわば失敗作と見る傾向は継承されていくことになる。武田泰淳「中国の小説と日本の小説」(1950年10月岩波書店『文学』第18巻第10号)にも、同様の感慨が記されている。

「將軍」を描いてあれほどまで冷徹な批評家であり得た芥川龍之介が、「支那遊記」に於ては、いたずらにとぎすまされた感覚の斷片を走らせたばかりで、ついに大陸國民の苦惱を自己の問題としてとりあげ得なかったのである。

紅野敏郎氏「芥川龍之介 △支那遊記と湖南の扇△」(1975)も同系列であるが、その社会背景にも具体的な目配りがなされた評論となっている。芥川への視線にはやはり厳しいものがある。

芥川龍之介に『支那遊記』一卷がある。(中略)動きつつある中国、苦悩する中国、つまり現実の中国への熱い関心、もしくは強烈な好奇心につき動かされての執筆というよりは、中国の風物、雰囲気、名所旧蹟への興味がより強く働いての執筆となっている。この中国旅行がいわゆる大正八年の五・四運動のあとだったにもかかわらず、である。(中略)「若き支那」の代表者李人傑の概要やその風貌は伝えても、その心の奥底に入りこんでの鋭い一瞥の記事はない。(中略)排日の根源にさかのぼって深く考えてみようとする努力は放棄されている。

だがこうした否定的な評価に対して、近年新しい観点から再評価する動きが起こっていることは注目される。遺稿「僕の瑞威から」¹³の一篇「レニン」に“君は僕の中にもゐるのだ”と書き付けること等、晩年の芥川と社会主義の関係についてはつとに指摘されるが、松澤信佑氏『新時代の芥川龍之介』(1999)は、社会主義への共感は一貫したものであったとの仮説を詳細に跡付けたものである。中国との関係についても、反戦小説「將軍」(1922)や日本の中国侵略を直截に非難した「桃太郎」(1924)等の存在、芥川が中国で会った李人傑が共産党成立に深く関わっていた事実、『支那遊記』に抗日運動の激しさが随所に描かれていること、帰国後にプロレタリア文学への関心が昂揚した事実などから、氏は次のように結論付けている。

芥川龍之介の中国体験に、プロレタリア文学の視点を向けてみると、芥川の実像がかなり明らかにになる。従来の芥川評価をはるかに越えて、芥川は時代や社会との誠実な闘いの中から作品を生み出し、文学の道を歩んだ作家であったことがわかる。

プロレタリア文学の観点からの従来の芥川評価と言え、宮本顕治「敗北の文学」(1929年8月『改造』11巻8号)や中野重治からの言及がすぐに想起されるが、それらは基本的にプチブル的な芥川の生に対して批判的な視線を投げたものであった。新しい読みが試みられているようだ。¹⁴

続いて、秦剛氏の「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象—〈支那趣味〉言説を批判する『支那遊記』—」(『国語と国文学』2006年12月号)を見てみよう。「支那趣味」たるオリエンタリズム言説をなぞる谷崎に対する意図的な抵抗であった可能性を指摘する秦剛氏は、見落とされてきた芥川の微細な視線と描写、日本の植民地支配への鋭い眼差し等々を丁寧な繙きながら、再評価を試みた。

谷崎の美味なる「支那」に対する芥川の抵抗は、一九二一年までの中国の激動の社会情勢とも関わっている。(中略) 視線の暖かさや…人間生活への関心などは、「支那」を享楽の対象としてのみ見ようとする主体には生まれるはずがない。

(中略)

「ジャアナリスト」芥川が日本人読者に直視させようとする〈支那〉そのものだった。…日本人読者に、ただの傍観者として無傷にテキストが読める安全な場所さえ与えていない。

『支那游記』に描かれた中国への“侮蔑”は決して感情的、扇動的なものではなく、文壇の「支那観」に対する芥川の抵抗であったと同時に、日本人に真実を直視させようと意図したものであったという積極的解釈は傾注に値しよう。秦剛氏はこの視点に立ち、斬新かつ詳細な切り口でテキストを裁断し直している。興味深いことに、現代におけるこの一人の中国人研究者のその視点は、実は1920、30年代の同時代中国における一部の文人たちの『支那游記』評価とも相通ずるものであった。彼らは、芥川が日本人に直視させようとしたというその中国の“真実”を逆に中国人自身への一つの啓示と見なして、『支那游記』を積極的に評価しようとしたのである。

四

本節では、『支那游記』を中心とした中国の芥川評価についてより詳細に検討していきたい。『支那游記』の中国への最初の導入は、1926年4月、当時中国文学研究会機関誌として大きな影響力を有していた『小説月報』誌上、夏丏尊(1885-1946)抄訳「芥川龍之介氏の中國観」である(該誌は前述のように後に「芥川特集」も編集)。原書が日本で出版されたのが前年の11月であるから、5ヶ月後にはもう中国に翻訳紹介されたことになる。読者からは当然の如く強い反響があった。1926年9月4日付『醒獅』第99号「読者論壇」に掲載された、閻葆明「斥芥川龍之介氏之謬論並掲日人對華外交手腕以告國人」と題する文章は次のようなものである。

祖国存亡の危機を救わんと図るこの時勢に、僕はもともと文芸作品を鑑賞しようなどという気持ちはなかった。だが学友の家で閑談していたところ、偶然に『小説月報』第17巻第4号に夏丏尊訳「芥川龍之介氏の中國観」が掲載されているのを目にした。読んで後、怒りが心底から湧き上がるのを禁じ得なかった。僕はなにも人並み外れて祖国愛が強いわけではないが、良心的に見て、その文学乞食芥川龍之介の謬論は、我々大中華民國の国体を損なう部分が多すぎると感じた。気持ちの高まりを抑えられず、徹底的に反駁しないわけにはいかぬ所以である。

ちっぽけな日本の文学乞食、芥川龍之介よ！(中略) おまえは何人かの無教養な村人たちとあのいまだ十九世紀頭脳の偽文人辜鴻銘、大清帝国の死に損ない奴隷の鄭孝胥ら数人の化け物に会っただけで、現在この中国全土に漲る鬱勃たる国民の志気と、仇敵日本に抗う空気に気付くことはないのか？ 至る所に書かれた「国の恥を忘れるなかれ」の文字は芥川氏には見えないのか？ 学生が唱う抗日歌曲は耳に入らないのか？(中略) おまえたち日本人が韓国、中国そしてあらゆる人々に対する非道徳的な思想は、強盗より一層ひどいものだ！

当時の情勢下、こうした反応は極めて自然なものであったに違いない。では、訳者の夏丏尊は如何なる意識で翻訳の筆を執ったのだろうか。彼は「訳者記」で次のように語っている。

上海へ行くたびに必ずある行きつけの日本の本屋へ行って、何か買う価値のある新書があるかどうか覗いてみる。今回は、何冊かの新書を買ひ、店を出ようとしたところ、本屋の主人が突然この本を指さして、「先生、あなたはこの本に興味を感じないかも知れないが、最近日本ではよく売れている。その中には貴国への皮肉や非難がとて多いよ！」と声をかけてくれた。そこで、その本を買ひ添え、上海から寧波への船の中で一通り読み終えた。

確かに書中の随所に皮肉やそしりが溢れている。しかし、公平な気持ちで論ずれば、そもそも国内の現状はその通りで、作者が故意に誇張したり妄りに付け加えたわけではない。たとえ作者が私の目の前にいたとしても、自分の国のために弁護するすべもないのだ。できるものなら国民一人一人に一度読ませ、作者の観察を鏡となし、自分が一体どんな高慢な顔つきをしているのかちょっと見てもらいたくてたまらなくなった。(中略)

芥川氏は日本では指折りの作家である。(その作品、例えば鼻、羅生門などはすでに周作人先生によって翻訳されている) その観察、その描写は、言うまでもなくすべてが文学芸術作家の視点から出たもので、ほかの何か考察団とか観光団体とかいったようなただ実業や政治の観点とは異なるのだ。

一九二五、十二。譯者記。

上海で行きつけの日本の本屋とは、内山書店を指す。日本への留学経験(1903-05)を持つ夏丏尊は、後に田山花袋「蒲団」や国木田独步、厨川白村を翻訳するなど日本文学紹介者として重要な役割を果たすことになるが、この当時、寧波の白馬湖中学教員としてたびたび上海を訪れ内山書店に出入りしていた。この中で、「鼻、羅生門などはすでに周作人先生によって翻訳されている」と記すのは明らかな誤りで、正しくは魯迅の訳になることは前に見た通り。『現代日本小説集』は周作人主体の編集であったから誤解したものであろう。夏は、芥川の「侮蔑」的内容も、中国の国民一人一人に反省と改善を促す意義を見出したと言うのである。だが、この夏丏尊の翻訳紹介に対して、当の魯迅が微妙な感想を持っていたことが、増田渉『魯迅の印象』(1948)に記されている。

魯迅は芥川とは表面はまるでちがったやうに見えるが、両者の人間の素質的な或る一面に於いてどこか共通のものがあつたと私は思ふが、魯迅は芥川のものを巴金のやうに空虚だとは見てゐなかつた。芥川は遊記を書いて中国の悪口を云つたので、中国では評判が悪かつた。しかしそれは紹介者(翻譯者)のやり方がよくなかつた、いきなりあんなものを紹介すべきでなかつたのだ、僕は芥川のものはもう少し中国の青年にも讀ませたいと思ふから、これから翻譯してみようかとも思つてゐる——と彼は私に語つたことがある。¹⁵

「魯迅と芥川の素質には共通のものがあつた」など、魯迅と親しく接した唯一の日本人たる増田渉の言葉として既に極めて示唆的であるが、魯迅もやはり“あんなもの”として『支那遊記』の負の面に注目していたこと、また、「鼻」「羅生門」以外にも翻訳の計画があつたことなど興味深い事実が語られている。魯迅の『支那遊記』への反応については、紹興出身で魯迅とも親交の密であつた孫席珍「魯迅与日本文学」(1981)にも綴られており、それは次のようなものである。

上海開明書店がかつて『芥川龍之介集』を刊行したが、そこには魯迅の二篇の翻訳以外に、5、6篇の小説と散文も収録されていた。…私に比較的深い印象を残すのは、芥川の一連の『支那遊記』である。…魯迅はかつて友人にそれは実にいい文章だと褒め、そして、我々中国人は昔みな夜郎自大だったが、後に自分で自分を欺くようになり、まるで阿Qが頭のできものを忌

み嫌ったように、ただ他人の心にもない御世辞を聞くのが好きなばかりで、他人が自分の問題点を指摘するのを最も嫌う。だから、芥川のような誠実な良い友人が来て我々を刺激してくれることがまさに必要だ、そうすれば彼等の頭もようやく目覚めてこようというものだ。と言っていた。ここから、魯迅が芥川に対して親近感を抱いていた理由は、その文学作品からだけではなかったことが見て取れる。¹⁶

意外にも増田渉の回想に反して、ここでの魯迅は夏丐尊とほぼ同様の感想を漏らしている。魯迅のことだから、「誠実な良い友人」を鵜呑みにするわけにはいかないだろうが、感情的な部分はさておき少なくとも効用という面から芥川の『支那遊記』を評価しようとしていたことは確かなようだ。また彼の日記「1926年4月17日」の記載「往東亜公司買《有島武郎著作集》第十一一本、《支那遊記》一本、共泉二元五角。」からは、やはりかなり早い段階で『支那遊記』に注目、入手していた様子が跡付けられる。

さて、初めて『支那遊記』を中国に紹介した夏丐尊は、1927年9月『小説月報』第18巻第9号【芥川龍之介專輯】に掲載した「湖南的扇子」訳「後記」では、芥川の学識やその「風刺」精神を紹介することでさらに具体的に推奨している。

芥川の譏りと諷刺の態度は、中国だけに対してではなく、日本に対しても、常に作品中で批判を加えている。例えば「將軍」で乃木大將を、「手巾」では日本の伝統思想を諷刺した。氏には確かに嘲笑を好む傾向があるとは言え、日本の文壇において、彼が知識に富み優れた学識を有することは公認の事実である。厨川白村が亡くなって後、一時彼を後任の教授に推す動きがあったが、それも彼こそが厨川を継ぐ唯一の人物だと見なしてのことである。彼は小説で有名だが、その読書傾向も極めて広範で、マルクスの資本論を、彼はドイツ語の原本で読んだということだ。

十六（1927：引用者注）年八月十五日 譯者附記。

日本留学生として、同じく文学に従事する者として、夏丐尊なりに時代に抗う気持ちが見て取れよう。

次に挙げる、魯迅とも交流がありやはり日本留学経験を有する韓侍桁（1908-87）という文芸評論家は「現代日本文学雑感（『現代日本小説』代序）」（1929年6月初出、1934年4月に韓侍桁著『文学評論集』に再録。）¹⁷の中で『支那遊記』を評価する。なお、論者はこれを巴金「幾段不恭敬的話」（1935年1月）に直接の影響を与えた重要な文章と考えており、少々長くなるが引用してみたい。

…私のいわゆる現代とはもっぱらに最近の大正時代を指している。（中略）現代の日本文学を瞥見することを厭わないものであれば誰でも、必ずやその量の多さに驚かされると同時に、その質の悪さに驚きを禁じ得ないことであろう。（中略）現代の日本文芸がそれ自身に適合した成功を収めていること、我々も承認すべきであろう、だが残念ながらまたそれが確かに何ら偉大な作品を擁しないことにも言及せざるを得ない。必ずやこう尋ねるものがあることだろう、君の定義する「偉大な人」の基準は何なのかね、と。私の意味するところはこうだ、一つの文芸作品であるなら、その成功は決して芸術の手法にのみ止まるべきではなく、人生に対して深遠なる探求を有し、それゆえそこに表現された悲しみや喜びは、決して個人的な身の出来事であってはならず、一つの民族のひいては全人類のものであるべきだ。（中略）西洋にこのような言葉がある、芸術家は世界に生きるのであって、世界に属するのではない、と。現代日本の

文芸界にいる作家たちに私は敢えて尋ねよう、躊躇することなく堂々とこの言葉に立ち向かえる者がいるかどうかと。(中略)

一昨年芥川龍之介が自殺したとき、一時期、中国の雑誌誌上では彼が盛んに取り上げられ、彼の作品はそのほとんどが翻訳されて中国にやってきた。彼の死去については種種異なる解釈があるとは言え、その不自然な死に対する哀悼の気持ちは共通していた。彼の死に言及すれば、すぐさま有島氏を連想することになるが、それは私の意見とは異なる。不思議なことに、私は芥川氏の中国游记を読んでから、彼に対して始終反感を覚えるようになり、彼の出世作「鼻」と「羅生門」を改めて読んでみると、私はこの作家の芸術への良心というものに対して根本的に疑問を抱くようになったのである。(中略) 彼の作品は読者に一時的な興奮を与える力を有するが、しかしそれらは深思熟慮に堪え得るものでは決してなく、誰かがもしも細かく斟酌したなら、それら作品の骨組みは完全に倒壊してしまうだろう。そこである時私はこう考えた、夏目漱石は彼の「鼻」を賞賛してから後、もしも彼が敢えて2回目3回目に読み返すことがあったなら、彼はきっと後悔したに違いないと。(中略)

この文章の最後に当たって、二人の同時代作家にはどうしても触れておかねばならない、それは谷崎潤一郎と佐藤春夫である。彼等は上に述べた数名の作家たちと日本文学の上で同じように重要である。谷崎氏は白樺派前後の作家、佐藤氏は新思潮派前後の作家で、どちらも異彩に富む。だが紙幅の関係で、本集に収めることはできなかった。

一九二九年一月、日本大岡山にて。

先に見た巴金の芥川批判と内容的に、またその情調と程度の点でも相通ずるだけでなく、「現代の日本文芸には残念ながら、何ら偉大な作品を擁しないことにも言及せざるを得ない」「芥川氏の中国游记を読んでから、彼に対して始終反感を覚える」「2回目3回目に読み返すことがあったなら、きっと後悔したに違いない」など、ほぼ同じ表現が散見されることは特に注目される。巴金が筆を執るのは1935年1月であったが、その前年の1934年4月に出版された韓侍桁『文学評論集』に収録されたこの文章の内容が自己の感慨にピタリと符合するものであったことで、巴金に少なからぬ共感を与えた可能性は否定できないと考える。¹⁸

また、この文章を序に据えた韓侍桁編『現代日本小説』に目を注げば、それは個人の編んだ翻訳集としては秀逸なものである。選編は広範でありながら重要作家をきちんと押さえてあり(志賀、武者、有島、芥川、菊池、谷崎、佐藤等)、分量も多く本格的である。特筆されるのは、こうしたアンソロジーの多くが旧訳をまとめ直したただけなのに対して、該書は新訳を多く採録し、そこに編者の本気が窺われる。また“代序”たるこの「現代日本文学雑感」も、日本(大正)文壇を深く否定的に分析したもので価値は高い。さらには周作人の例えば志賀直哉への解釈に異を唱えるなど著者の意識が真摯に表現されており、読者もそうした点に魅力を感じたことであろう。

(「清兵衛と瓢箪」について) これは僕のこの短編小説についての解釈である。最初は極めて自信があり、誤りなど有り得ないと考えていた。だが周作人先生の別の解釈を目にした後は(『談虎集』参照)、全くわけがわからなくなった。周先生はそれを児童教育に資する悲喜劇だと解釈された。僕はもとより周先生のそういう解釈には断固承服する気はない、だがまたいったいどうすれば僕の解釈を皆に納得させることができるのかも皆目見当がつかないのだ。¹⁹

また前述したように、巴金も魯迅・周作人の『現代日本小説集』(1923)を意識していたが、こ

の韓侍桁も、自己のこの翻訳集のタイトル自体を『現代日本小説』としていること、序文で「現代の日本文芸がそれ自身に適合した成功を収めていること、我々も承認すべきであろう」と書き付けるのが、巴金同様に『現代日本小説集』の周作人序文「日本の小説在二十世紀成就了可驚の發達」を意識して発せられた可能性が高いこと、何より作家作品の選択が『現代日本小説集』を踏襲したものとなっていることなどからも、中国初の日本近代文学アンソロジー『現代日本小説集』（並びにその編訳者たる魯迅周作人）の存在の大きさがここにも改めて窺える。

こうした批判が渦巻く中で、果たして芥川作品は中国の文壇に実際どのように受け入れられていたのか、一つのヒントを与えてくれるのが次に引く馮子韜（馮乃超：1920-83）の行動である。日本国籍華僑の家庭に生まれ育ち、東大文学部への留学経験も有する彼は、韓侍桁や巴金と同時期の1931年に、馮自身の訳になる『芥川龍之介集』を出版している（未見。後の1934年9月、上海・中華書局『現代文学叢刊』に編入、そこには「母」「將軍」「河童」「ある阿呆の一生」の4篇が収録され、彼の論文「芥川龍之介の作品作風和藝術觀」も収める）。「芥川龍之介の作品作風和藝術觀」は、自身の翻訳出版になる「芥川集」の解説であるにもかかわらず以下のように辛辣なものである。

彼の先生夏目漱石はかつて（小説「鼻」を評して：引用者注）次のような言葉で彼を激励したそうだ、——「こんな作品をあと十篇も書けば、日本はもとより、世界でも成功した Unique な作家の一人となるだろう²⁰」、と。だが、私の見るところ、このような作品は今ではもう十篇と言わず数多く書かれているし、世界の文壇が彼の先生同様に彼を評価するかは大いに疑問である。

彼が中国文壇の注目を浴びたのは、おそらく彼の自殺であって彼の作品ではないだろう。彼の作品のうち、成功したもののはほとんどはすでに中国に移植された。だが国内の文壇は依然として彼に対してとても冷淡な状態である。私が思うに、中国人の菊池寛や谷崎潤一郎に対する意識は芥川に対するよりよほど親密である。世界の文壇でもおそらくは同様であろう。

前半部分で、先に見た韓侍桁同様に漱石の賞賛を揶揄することも注目されるが、そもそも芥川作品をここまで貶めるのならなぜ翻訳出版までしたのかという疑問が生ずる。そこには生活のためというやまれぬ事情があったようだ。「馮乃超年譜」を繙けば、

（1930年）年末、魯迅は養羊（或いは養鶏）に関する日本語の薄い本を馮乃超に翻訳させ、その稿料でもって生活上の困難を解決させようとした。

（1931年）七月、馮乃超はフランス租界環龍路にあった丁玲の家に居候となるや、すぐに日本の小説集『芥川龍之介集』を翻訳することで生活費の足しにした。

本人は不本意だったかもしれないが、お金の爲に芥川を選んだことは芥川龍之介が当時の中国で余程の人気を博していた証拠にも数えられよう。年譜にも少し見えているが、芥川の翻訳についても弟子思いの魯迅が馮の生活を慮って依頼したのではないかという観測もあるようだ。²¹

*

1930年代、中国が文芸をそのものとして咀嚼する余裕を失っていく時代の中で、芥川文学の真面目は捨象され、より中国に資するものとしての役割が付与されていった²²ことは当然の帰結だった

のかも知れない。またそこには、日本と中国の文学観の相違という根本的な問題が横たわっていたとも考えられる。増田渉「巴金の日本文学観」(1947)は、巴金に代表されるこの一連の『支那遊記』論争を次のように概括する。

芥川の文学をそれほど簡単に、特に空虚の二字でもって片づけようとするのは、われわれには不満であり、巴金には何も分らないのだと、こちらでも片づけてしまいたくもなる。それしかし芥川の最初の売り言葉が、やはり巴金のカンにさわりすぎていたからではないかと忖度される。だが結局は、ナショナルなもの、民情というか国情というか、その置かれた歴史的な時代感覚、時代意識の相違が根本にあって、そこから出てくる文学観、あるいは文学の使命観といったものに相違がみられ、作品評価に大きな食い違いができてくる、ということであるかも知れない。(中略) 巴金が日本にいたとき、つまり日本で芥川の記事を読んだときは一九三四―五年のころと思われるが、当時中国の領土に「満州国」が成立して二、三年後に当り、また日本軍の華北侵攻がすでにはじまっていて、中国人は誰でももう日本を敵として、侵略者として意識していたときである。巴金の『無遠慮な話』はこのような時点で書かれたものであるし、それは売り言葉に買い言葉であったといえるとしても、それと重なって、個人的なものを超えた国民的抗日意識を背景にもっていたことも考えられるわけである。(中略) しかし文学批評を単に作品世界に限定せず、それがあくまで実生活とつながってはじめて文学の社会的意味があるとする巴金自身の気もちの真面目はわかるような気もする。文学の社会的機能、あるいは社会的責任を重く見るからだと思う。それは彼等が文学の社会参加を志しているからで、やっぱりここに中国作家の文学に対する見方の特色があると見るべきであろう。²³

最後に、小論の始めにも引いた佐藤春夫「からもの因縁―(支那雑記の序として)」(1941)から引用する。芥川の『支那遊記』は1925年に出版され、そこに散りばめられた「侮蔑」の意味は現在に至るまで議論的となっている。日中戦時下の1941年に佐藤が書き付けた以下の言葉、引用の前半は芥川という言葉と一見極めて似たものとなっている。

「大陸と支那人」といふ大問題をここで論ずるのは聊か事面倒に渉るしこの論は別に改めて記すつもりではあるが、事の順序として一應は言はずばなるまい。性急に結論だけを言ってしまうと唐宋明清は文化國であらう。しかし中華民国には文化は無いと断言して差支ないと思ふ。(中略) それでは支那の古代からの文化は一體どこへ行つてしまつたのか。外ではない、かくいふ我々の國へ皆來てそのうちの有意義なものは我が國にあるといふも失當ではあるまい。…支那の文化は自國で全く枯死して我が國で開花せんとしてゐる。我々が大陸に進出してそこに文化を樹立する權利も義務もある所以ではなからうか。

ここに佐藤が記す「中華民国には文化は無いと断言して差支ないと思ふ」との言葉には、芥川が支那を愛するが故に書いた同様の言葉とは、すでに全く異なる意味が託されている。芥川の『支那遊記』が後世に至るまで日中両國で熱く取り沙汰されるに比して、おそらくは芥川を意識して命名されたであろう佐藤のこの『支那雑記』は殆ど注目されることはない。1927年という、日中関係が加速度的に悪化する前に他界した芥川の中国観が不分明な点を多く含むのは当然であるが、戦中戦後を極めて饒舌に生きた佐藤は後世に彼なりの“解答”を与え続けてしまった。実際には芥川よりも佐藤の方がずっと中国文学に、日中交流に積極的献身的に取り組んでいたと言えようが、芥川の

方がより珍重されるのは仕方のないところか（冒頭の表に挙げたように、中国における芥川研究論文304篇に対して佐藤は32篇）。しかし、佐藤にしろ芥川にしろ、中国で注目されるのは概してその文学史的意義や、中国との関係に止まっている。芥川に関する評論、研究論文は少なくないが、その多くは『支那遊記』と魯迅関連という“熱門”ものである。芥川の文学に描かれた世界は非現実的、空想的、また古典に根差したものが多く、常に現実と対峙したりアリズムを意図する中国の文学芸術観と基本的に相容れない²⁴、或いは芥川文学は“非革命（革命的でない）”な点が最大の問題である²⁵等々の見方もあるようだが、小論でも垣間見たような例えば日本で直接芥川を手にした留学生たちの傾倒と紹介は、やはり中国の文学界へ某かの影響をもたらしたに相違ない。

劉岸偉氏の論文「作家魯迅の誕生」（1996）に「魯迅の日記を調べると、丸善や東京堂などを通して、日本の書物を頻繁に購入し始めたのが一九一七年からだったことが分かる。…この時期が、「新思潮派」と呼ばれ、日本の文壇に頭角を現わした「新人」たちの颯爽たる登場の時期とほぼ重なっていた」と指摘される²⁶が、魯迅は、民主や改革を高唱した1919年の五四運動が過ぎ去った後の反動政治による暗黒期にあった1921年に初めて芥川翻訳の筆を執り、その後数多くの翻訳を手がけるなど日本文学を積極的に追究し始める。早くから芥川を始めとする日本の近代文学に触れていた魯迅は、暗く閉ざされた時代の中で、そこに描かれた人間への深い内省に改めて強く共鳴したのではなかったか。

フィルターを介することなしに、「实事求是」でこれから深めていければと考えている。

注

- 1 中国初の芥川（翻訳）著作集『芥川龍之介集』は夏丐尊編、1927年12月に上海・開明書店から出版された。魯迅訳「鼻」「羅生門」のほか、夏丐尊訳「秋」「南京の基督」「湖南の扇」方光燾訳「袈裟と盛遠」「手巾」章克標訳「藪の中」、附：夏丐尊抄訳「支那遊記」、沈端先（夏衍）訳「絶筆」（「致某旧友の手札」「致家庭の遺言」）を収録。
- 2 詳細については、拙稿「魯迅『野草』における芥川龍之介」（『日本中国学会報』第52集、2000年）、「『詩』への想いー芥川と魯迅ー」（『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第6集第2号、2002年）等を参照されたい。
- 3 謝六逸は、自身で『近代日本小品文選』（1929年、上海・大江書舗）も編んでいる。収録作は、芥川「女體」「尾生の信」「英雄之器」「黄粱夢」「侏儒の話」、佐藤春夫「呵呵薔薇你病了」、漱石「貓的墓」「火鉢」等。
- 4 この論文は（上海）北新書局から単行本『日本文学史』（1929年7月）として出版される。王鵬氏の論文「民国時期芥川龍之介研究反思」（『漢語言文学研究』2011年3期）89頁に、「謝六逸1918至1922年留学日本，是一名日本文学專家，他的《日本文学史》堪称国内第一部日本文学史」とある。
- 5 加藤武雄『明治大正文學の輪郭』（1926年、新潮社【文芸入門叢書2】）実際に謝六逸の文章を比べてみると、例示作品から内容まで加藤該書に依拠していること明白である。
- 6 佐藤春夫「からもの因縁ー（支那雜記の序として）ー」『支那雜記』（1941年初版[43年三版]、大道書房）、1～6頁。
- 7 竹内好「五造語法について」『中国を知るために 第1集』（1967年、勁草書房）原載。『竹内好全集』（1981年、筑摩書房）、22頁。
- 8 黎烈文「海上哀音ー聞芥川龍之介之死」1927年8月21日『文学週報』第5巻第3期原載（同

誌には黎訳「蜘蛛之絲」掲載。) この文章は翌1928年10月に黎烈文の芥川翻訳集『河童』(上海・商務印書館)に収録される。この『河童』には「河童」「蜘蛛之絲」「海上哀音(代序)一聞芥川龍之介之死」(該文は1936版では削除され、代わりに魯迅訳「鼻」「羅生門」を収める。)、附録として永見徳太郎著・黎烈文譯「芥川龍之介氏與河童」を収録する。

- 9 秦剛氏「現代中国文壇对芥川龍之介的譯介和接受」(『中国現代文学研究叢刊』2004年第2期)等。なお、秦剛氏の該論文は中国における芥川受容を論じた全面的かつ周到なもので、小論も多く示唆を受けている。
- 10 芥川を最初に中国へ紹介(翻訳)した魯迅の芥川逝去への反応は残念ながら見出すことができないが、『現代日本小説集』を共同編集するなど日本の近代文学にむしろ兄よりも傾倒していた弟の周作人は「遺書抄」と題する文章の中で触れている。だがその内容は奇妙なものである。「日本文人芥川龍之介於七月二十四日服毒自殺了。據報上所载,芥川的自殺很經過冷靜的考慮與仔細的安排,這是頗可佩服的。(中略)芥川的死最感到興趣的是他的死法的選擇。…芥川是正經地在那里研究,而其結果則采用了催眠性的科凱因(コカイン:引用者)罷了。」その“死法(死に方)”にひたすらこだわるのみで、その主義や文学への言及は一切見えない。周作人は芥川の文学に本当に興味を感じなかったのか、それとも政治的韜晦と見るべきか。魯迅の反応も含めて課題としたい。
- 11 『巴金文集 第十卷』(1961年、人民文学出版社)に「幾段不恭敬的話」を収める『点滴』(評論文集)を収録するにあたり、「幾段不恭敬的話」は削除されている。ただ、著者本人の意図かそれとも出版社の判断かは不明。削除の事実については、王向遠氏「芥川龍之介与中国現代文学—対一種奇特的接受現象的剖析」(『国外文学(季刊)』1998年第1期)等の指摘による。
- 12 吉田精一「二十 支那旅行」『芥川龍之介』(1942年、三省堂)、213頁。
- 13 1928年2月1日『驢馬』第11号。『芥川龍之介全集 第23卷』(1998年、岩波書店)、500頁。
- 14 芥川が対談した李人傑(李漢俊)の文学的な功績の詳細について、工藤貴正氏「李漢俊と表現主義(上・下)」(『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』第45・46号、2013年3月・2014年3月)が初めて明らかにする。同論文の注では芥川と社会主義に関する先行研究の紹介もなされている。
- 15 増田渉「巴金の日本文学観」『魯迅の印象』(1948年、講談社)、236頁。1947年4月『新中国』(実業之日本社)第4号原載。
- 16 孫席珍「魯迅与日本文学」『魯迅研究 5』(1981年、中国社会科学出版社)、153頁。
- 17 韓侍桁(1908-87):本名雲浦。天津生まれ、天津南開中学卒。五四時期には魯迅や、トルストイ、ツルゲーネフなどの影響を受ける。1924年、日本留学。慶応大学英文科に入学するも授業に興味を感じずほとんど登校しなかった。この頃より口を糊するために翻訳を始め、翻訳や作品を『現代評論』『小説月報』『東方雑誌』等に投稿する。1928年から『語絲』週刊にも掲載され、魯迅とも親しく交流した。1930年の左聯参加後は、派閥の関係などから次第に魯迅と離れる。広東中山大学、済南齊魯大学教授などを歴任。『近代日本文芸論集』『現代日本小説』のほか、クロボトキン『ロシア文学史』やブランデス『十九世紀文学之主潮』など数多くの翻訳がある。彼の経歴、文学活動について、韓侍桁「我的経歴与交往」(『新文学史料』1987年第3期)、子安加余子氏「『語絲』と韓侍桁」(2001年3月『(お茶の水女子大学)人間文化論叢』第3巻)等を参照した。引用の同氏「現代日本文学雑感(代序)」は『現代日本小説』(1929年6月、上海・春潮書局)原載。同氏著『文学評論集』(1934年4月、上海・現代書局)に再録。
- 18 韓侍桁の芥川評論を取り上げたものに、前出秦剛氏「現代中国文壇对芥川龍之介的譯介和接受」、

- 劉芳氏「芥川龍之介の「死」と二十世紀の中国文学」（2014年3月、首都大学東京人文科学研究so『人文学報』第493号）などがあるが、管見の限り巴金や『現代日本小説集』との関連を直接指摘したものはないようだ。
- 19 韓侍桁「現代日本文学雑感」（1934年、現代書局刊『文学評論集』）、12頁。
 - 20 漱石から芥川への手紙原文（1926年2月19日付）では、「あゝいふものを是から二三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます」となっている。『漱石全集 第二十四卷』（1997年、岩波書店）、511頁。
 - 21 「馮乃超年譜」『馮乃超研究資料』（1992年、陝西人民出版社）、118、120頁。馮の生活困窮と芥川翻訳の関連については、前出秦剛氏「現代中国文壇対芥川龍之介の譯介和接受」の指摘から教示を得た。
 - 22 丁丁「芥川龍之介の中國墮落觀」（1933年1月『新時代』[上海]第3卷第5・6期【新年号】）などの関連資料を、華東師範大学外語学院日語系の潘世聖教授から提供して頂いた。なお、氏の「夏目漱石、芥川龍之介“中国叙事”再考」（『浙江学刊』2012年3期）からも多くの教示を得た。
 - 23 増田渉「巴金の日本文学観」『中国文学史研究』（1967年、岩波書店）、353-359頁。（注14にも引くように、1947年4月『新中国』（実業之日本社）第4号原載）。なお、『中国文学史研究』所収のものには次のような「前書き」が附されている。「（前書き）これは昭和二二年、雑誌『新中国』に『中国人のみた日本文学』として載せたものである。今日では、とくに中国の事情はかなりちがっているし、また、これを書いたときは直接知らなかった巴金にも、数年前、彼が中国の作家代表団の一人として日本を訪れたとき、歓迎の席で彼にあたりした。（中略）今日でもなお、日本と中国との文学の関係（単に文学とは限らないと思うが）には、ここに巴金がいつているような種類の食いちがいの部分、お互にお互を理解することのむずかしい、どうにもならないようなところが、かなりあるように思う。」
 - 24 凌燕氏「中国現代文学史上的芥川龍之介（1921年-1949年）」（華東師範大学2006年修士学位論文）、8頁。
 - 25 同注4、王鵬氏「民国時期芥川龍之介研究反思」、88頁。
 - 26 劉岸偉氏「作家魯迅の研究—芥川龍之介・菊地寛に関わる一仮説」1996年4月『比較文学研究』第68号。

追記：小論は、2013年11月30日に名古屋大学で開催された日本比較文学会第35回（2013年度）中部大会シンポジウム「中国・台湾における大正文学—受容の思想的時差と歴史的連続・非連続性」での報告に基づく。参加の先生方から多くの貴重なご教示を賜った。

なお、本研究はJSPS 科研費基盤研究（C）「中国における日本近代文学受容の研究—魯迅・周作人編『現代日本小説集』を端緒として」（課題番号：26370411）の助成を受けたものである。

近代中国对日本大正文学的译介与接受 ——以《现代日本小说集》与芥川龙之介为线索——

秋 吉 收

与中国近代作家及其作品在日本被接受情况的研究相比，日本近代文学在中国的受容情况这一课题可谓中日比较文学史上的一个薄弱环节。然而，20世纪初，鲁迅、周作人翻译出版了《现代日本小说集》，给“近代文学”带来了曙光，留日学者开始纷纷译介日本的近代作家，也出现了像周作人一样专门从事这方面工作的人。由此可见，日本的近代文学与中国近代文学极其相关。本文以历来研究中所忽视的日本文学的背景等因素为出发点，着眼于中国文坛曾予以特别关注的芥川龙之介，涵盖同时期的佐藤春夫等作家，更加详尽地考察近代中国对日本大正文学的译介与接受。